

こと一廻」と浄土往来をひたすら、庶幾う自分を描き筆を置く。そこには仏の道でしか生かされない、救済の道が残されていない今日の自分の姿に対する諦念が色濃く反映されている。「1・太宰府謫居一期」「2・太宰府謫居二期」に見られる作品群とは全く異質の詩風の作品となっている。ここにはこの期の作品の特質を見事に凝縮したものを見る思いがする。筆者は、この作品こそが、残されている『菅家後集』の全作品を吟味した中で、辞世の作ではないかと推測している。

(注一) 『平安時代文学と白氏文集―道真の文学研究篇二冊―』 金子彦二郎著 (四〇〇頁)

(注二) 拙稿「『菅家後集』編纂事情の一考察―巻尾の詩「謫居春雪」の解釈を通して―」

(『菅原道真論集』和漢比較文学会 勉誠出版)